

『#19 番目のカルテ』（2025 年）を netflix で視聴した。主役は嵐の松本潤。

第一話

民間の U 総合病院は、院長の独断で新たに総合診療科を開設するらしい（なんと私が 25 年前に札幌医大総合診療科にたった一人で赴任した時と同じ設定である）。

若い女性が体の痛みで整形外科を受診するところから始まる。患者は痛みを訴えるが、医師たちは「病気はない」と主張する。患者が思い込む病気を医師たちは取り上げてくれず、精神的なものに見なされたように患者は思い、待合室で医療に不信を抱く。これを医療人類学的用語に置き換えると、illness（病感）を訴える患者に対して、disease（疾病）はないと医師たちが否定する構図である。医療人類学では病気を 3 つに分けて考える。先の Illness, disease に加えて、社会的に認定して欲しいという sickness である。この 3 つを医師が認識して使い分けると患者との間に軋轢は起こしにくいと言われている（疾病は見つかりませんが、辛いのですね）が、如何せん医学部では教えない（大部分の医師が認識していない）。総合診療科にはこういう患者がよく来るということで、総合診療を理解してもらうにはナカナカうまい導入である。

整形外科に骨折で入院中の患者が主治医にのどの痛みを訴える。耳鼻咽喉科へ紹介しようとするところへ、主人公 T 医師が通りかかり、問診から AMI と診断し、救急手術で一命をとりとめる。観察力がすごい。まるでシャーロックホームズのような。その後、まだ総合診療科には患者が来ないので（私の時と同じ状況）、T 医師は各科の入院患者を観察して回る。

劇中のテレビに総合診療の名医が問診と身体診察だけで SAPHO 症候群（滑膜炎 [Synovitis]、ざ瘡 [Acne]、膿疱 [Pustulosis]、骨化症 [Hyperostosis]、骨髓炎 [Osteitis] の頭文字から命名）を診断する（どうもこの名医が T 医師の師匠に当たることが最後に映し出される）。

全身の痛みで苦しむ患者がいるが、どこの科を受診しても異常なしと言われる。休みを繰り返し会社でも居場所がなくなる。嫌がる患者を後輩医師に診察させられた T 医師が説得して入院させる。その結果、検査をしても異常は見つからなかった。そこで付けた診断は線維筋痛症（私もそう来るかと思った）。患者ははじめてラベリングされて、涙を流すのである。線維筋痛症と診断された女性と

してレディー・ガガ (Lady Gaga) が有名である。彼女は 2017 年に自身の Twitter でこの病気を公表し、痛みのためにツアーを中止した。

T 医師役の松本潤が、演じるのは「余りにも理想過ぎる総合診療医」だ。笑顔も話し方も患者に向かう姿勢も（私もこんな医師に診てもらいたい）。

理想の総合診療医 T が今後、どのような騒動に巻き込まれてゆくのだろうか。
第二話以降が楽しみだ。

総合診療医とは次のように考えられている。

患者の「からだ・こころ・生活」を総合的に診る医師であり、診療科をまたいだ初期対応と継続的なケアを担う存在である。特定の臓器ではなく、人間全体を診る視点が特徴でもある。

総合診療医の役割と特徴

- ・診療科を問わず初期対応を行う。

体調不良の原因が不明な場合でも、総合診療医は患者の訴えを受け止め、必要に応じて専門医へつなぐ。

- ・患者の生活背景や心理面も考慮

病気だけでなく、職場環境、家庭状況、精神的ストレスなども診療の対象。たとえば頭痛の裏に抑うつ状態が隠れている可能性も見抜く。

- ・地域医療の要として活躍

高齢化が進む日本では、複数の疾患を抱える患者が増加。総合診療医は在宅医療や介護支援なども含め、地域の健康を支えるジェネラリストである。

- ・専門医との連携力が重要

必要に応じて雑木専門医と連携し、患者に最適な医療を提供する。医療チームの調整役も担う。

総合診療医に求められる資質

- ・幅広い医療知識と臨床推論力
- ・共感力とコミュニケーション力
- ・地域社会への理解と貢献意識
- ・柔軟な対応力とリーダーシップ

評価：★★★★★